

ベルクソンの論述の方法とその意義 ——身体運動における量と質の考察を通して——

川里 卓

本論文の目的は、フランスの哲学者アンリ・ベルクソン(1859-1941)の『意識に直接与えられているものについての試論』(以下『試論』)の第一章で議論される、身体運動における量と質の関係について検討し、ベルクソンの論述の方法とその意義を追及することである。

ベルクソンはウィリアム・ジェームズについての論文の中で、自身の方法論について次のように述べている。

理性を最大限満足させるために、事物を観念的に構成する代わりに、経験が私たちに与えるものに、純粹にまた単純にとどまろうとするならば、私たちは全く違う方法で思考し、表現するのではないだろうか。(PM, 1441)⁽¹⁾

近代の西洋の哲学では、思考が事実と一致することが真理であると考えられてきた。ベルクソンは、カント的な理性が事実を構成すると考えるのではなく、記述が事実そのものに沿うこと、あるいは事実を寄せ集めることによって、一つの認識を得ることを目的とする。すなわち、

経験の多様な領域には、異なった事実の集団が見つかると思はれる。この事実の集団の各々は、私たちが求めている認識を与えるわけではないが、それを見つける方向を私たちに示すものである。ときに、一つの方向が示されるだけでも何ほどこのものである。また、いくつもの方向が示されれば、大変なことである。というのは、これら方向は、私たちがまさに探し求めている一つの同じ点に集中するからである。(CV, 817)⁽²⁾

『試論』の第一章では、今引用した方法を読み取ることが出来る。『試論』の第一章のタイトルは「心理的状态の内的緊張について」である。第一章では、「内的緊張の強さ」について論じるために、例えば「美的感情」、「筋肉努力」、「感情的感覚」、「表象的感覚」などの具体的な内容が扱われる。また、各々の問題の記述が複雑に入り組んだものであるため、一見すると論旨を掴みかねる箇所である。ベルクソンの論述の方法は、因果関係による事実の理解の記述の仕方を問題とするのではない。ベルクソンが重視するのは、様々な事実を集めることで、そこから自然と生ずる一つの認識を見出そうとすることである。『試論』の第一章では、内的緊張⁽³⁾の姿が様々な角度から検討される。本稿では『試論』の第一章で扱われる「内的緊張」(intensité)、特に身体的感覚と結びついた内的緊張の考察を取り上げ、ベルクソンの方法、つまり、ベルクソンのものの捉え方の特徴を明らかにする。

まず内的緊張(intensité)の定義を見てみたい。ベルクソンは次のように述べている。

内的緊張という観念は、表象的意識状態が外的原因によって研究されるか、または、それ自身充足したものとして研究されるかに応じて、二つの様相を呈する。第一の場合において、内的緊張の認識は、ある結果の質によって、ある原因の大きさを評価することから成立する。(中略)第二の場合では、内的緊張は、本質的な状態のただ中で私たちが捉える、程度の差はあれ多くの単純な心理的事実の多様体と呼ばれるものである。(DI, 50)⁽⁴⁾

内的緊張にベルクソンは二つの特徴を置いている。まず、結果としての質的な心理状態を、原因である量的なもので解釈する内的緊張である。次に、諸々の心理状態が互いに融合した状態で把握されるものとしての内的緊張である。これはベルクソンが『試論』の第二章で論じる「持続」(durée)に関連した内的緊張である。第一の内的緊張に関して、ベルクソンはここでカントの「内包量」についての批判を試みている。フランスの哲学者フレデリック・ワームズは、『試論』の第一章の議論が「科学的心理学を批判するだけでなく、カントの『内包量』のような純粹でない概念を批判すること」(DS, 56)であると述べている。カントは『純粹理性批判』において感覚が量を持つものであると考える。すなわち、「感覚には、なるほどいかなる外延量も帰せられないが、それでも或る量が帰せられるのであって(中略)それゆえ内包量が帰せられる」(『純粹理性批判』原佑訳、370-371頁)。カントは感覚が量的なものを含むと述べているのに対して、ベルクソンは心理的な状態は量を含まない質的なものであると考える。『試論』における議論の一つの重要な点は、カントの「内包量」の批判である。本稿ではこれを第一章で「表象的感覚」(sensations représentatives)と結びつけて詳しく論じる。

心理状態を質的に考察することは、感覚相互のコントラストによる比較を可能にする。例えば、レモンを食べた後に梅干を食べてもあまり酸っぱさが強調されないが、チョコレートを食べた後で梅干を食べると、酸っぱさという感覚がより強調される。酸っぱさという感覚は絶対的なものではなく、状況や文脈においてその意味が変化するのである。同様に、空の青さは、それが雲一つない状況において現れるのと、雲の隙間から垣間見える場合、さらに木の下から葉の間に見える場合とで、その青さの色合いが全く異なる。周囲に配置される色彩によって、青という色の効果は別のものになる。この点に関して、ゲシュタルト心理学の研究を取り上げてみよう。ヴォルフガング・ワーナーはハインツ・ケーラーの実験⁽⁵⁾を取り上げて、知覚の相対性について述べている⁽⁶⁾。ケーラーは灰色の地面とより暗い色の地面を用意し、灰色の地面からだけ、穀物をついばむように鶏を訓練した。その後、灰色の地面により明るい色の地面を隣接させ鶏を放すと、鶏は灰色の地面ではなく、灰色よりも明るい色の地面から穀物をついばむようになったという。鶏の行動は、地面の明暗の程度に応じて変化する。この例は、ある感覚が相対的な区別により成立するものであり、感覚相互のコントラストが重要な意味を持つこ

とを示している。

ワームズによれば、我々が扱おうとする「内的緊張」に関して、二つのテーマがあるという。ワームズは次のように述べている。「ベルクソンの目的は、一つの心理的状態の『内的緊張』を評価する二つの方法を区別することにある。それは、一つの心理状態が意識の全体に与える質的な変化によるものと、程度の差はあれ正當に一つの心理状態が付け加えられた、外的対象の大きさによるものである」(DS, 56)。ワームズが内的緊張を評価する一つ目の方法は、一つの心理状態の変化が、精神の全体に質的な変化を与えることを捉える視点である。二つ目の方法は、筋肉の感覚など、量的なものと結びついた心理状態の内的緊張を捉える方法である。本論文では、これら二つの方法のうち特に後者の方法を、「身体的感覚と結びついた内的緊張」として第二章で検討する。本論では上記の観点から、身体的感覚と結びついた内的緊張の姿を明らかにし、ベルクソンの論述の方法とその意義について検討する。すなわち、後の著作にも見られるベルクソンの論述の特徴が、彼の最初の著作である『試論』の第一章においてすでに見られることを検証し、この方法が現実の多様な側面を記述可能にしていることを明らかにする。言い換えれば、西洋の伝統的な哲学が理性と事実の一致を目指してきたのに対して、ベルクソンは事実そのものに即して考察を展開し、それら事実を記述できる論述の方法を考案している点に、彼の論述の方法の意義があること本論で示したい。

1. ベルクソンによるカント批判

本章では、『試論』における「表象的感覚」(sensations représentatives)という概念の考察を通して、ベルクソンによるカントの「内包量」の批判について検討する。

カントは『純粋理性批判』の第二部門「超越論的論理学」の第一部「超越論的分析論」の第二篇「原理の分析論」の第二章第三節、2「知覚の先取」において、序論で引用した「感覚には、なるほどいかなる外延量も帰せられないが、それでも或る量が帰せられるのであって(中略)それゆえ内包量が帰せられる」(『純粋理性批判』原佑訳、370-371頁)という考えを提出している。ここでカントは感覚に量的なものが帰属するという議論を行っている。以下、この内容について、『純粋理性批判』の内容をより詳細に検討した後で、カントの議論に対するベルクソンの批判を検討していこう。

「知覚の先取」の議論をカントは次の定義から開始する。すなわち、「知覚の先取の原理とは、次のことである、すなわち、すべての現象において、感覚の対象にほかならない実在的なものは、内包量を、言いかえれば、度を持つということが、それである」(前掲書、369頁)。この定義においてカントは、あらゆる現象、つまり感覚が対象とする実在的なものは、度が含まれると述べている。ここで言われる「度」とは何か。それを考察するために、まずカントが言う「実在的なもの」について検討してみよう。「実在的なもの」は、主体から切り離された、単なる客

観的なものとして存在するではない。カントはむしろ、対象を眺める主観との関連における対象の認識を考察している。カントは言う。「知覚の対象としての諸現象は、直観を超えてさらに、なんらかの客観一般のための実質(中略)を、言いかえれば、感覚の實在的なものを、たんに主観的な表象としてそれ自身のうちに含んでいるが、そうしたたんに主観的な表象について人は、主観が触発されているということ意識しうるにすぎず、だから人はそうした表象を客観一般と関連づけるのである」(前掲書、370頁)。ここでカントは、知覚対象である諸現象が、「客観一般のための実質」を、主観との関連において含んでいるとするが、実際私たちは主観との関連の中で現れる対象の姿を、「客観一般」として扱う特徴があるという。この点に関してドイツのカント研究者ハンス・ミヒャエル・バウムガルトナーが、『カント入門講義』の中で述べている解説を取り上げて見よう。バウムガルトナーは言う。

現象というものは知覚されたものである。すべての知覚のうちには、感覚が含まれるが、この感覚は現象の側に対象的な相関者をもっているのである。この相関者というのは、「何らかの客観一般に対する質料」、つまり「感覚の實在的なもの」である。それゆえ、すべての現象のうちには、主観的に感覚された事象内容が含まれているが、これは空間と時間において与えられたものに関係しているのである。この事象内容はより強く、ないしはより弱く感覚されうるから、ある感覚量がこの事象内容に付与されねばならないが、この量は決して空間、時間における量(外延量)ではありえず、単に感覚の規定量、つまり度でありうるだけである。(『カント入門講義』、有福考岳監訳、93頁)

ここでバウムガルトナーは、現象が知覚されたものであり、この知覚の内部には感覚が含まれていると述べている。感覚においては、現象の側に「感覚の實在的なもの」が存在する。すなわち、我々にとっての「實在的なもの」とは、我々に現象として現れるもののなかに存在するのであり、対象の側に存在するのではない。また、主観的に感覚される現象は、状況や場合によってその強度が変化するため、そこにはある「感覚量」が与えられる必要があるとバウムガルトナーは言う。しかし、これは空間や時間の場合における「量(外延量)」と同じ意味で用いられる「量」ではない。空間は拡がりをもち、時間は、数直線上や時計盤において「量」として測ることができる。ここには「外延量」としての量という特徴が存在する。カントは外延量とは違う特徴が感覚にあることを示すために、「度」という語をそれに与える。カントはこのように感覚の中に「度」を帰属させるのである。

カントと同様、ベルクソンが提出する「表象的感覚」の概念には「感覚」(sensation)という言葉が入っている。「感覚」とは、音、色、味、寒暖などから受ける印象や感じを意味し、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚などに分類される⁽⁷⁾。また、ベルクソン自身は『心理学講義』において、「私たちは、感覚を、身体において生じた印象からの直接的な心理的結果と呼ぶ」(CP, 78,

私訳)と述べている。以上の例においては、身体感覚器官を通じた心の働きが「感覚」であると考えられている。そこで、この定義を踏まえて、次にベルクソンの「表象的感覚」について検討してみよう。

「表象的感覚」とは、例えば「音の感覚」や「熱さの感覚」、「重さの感覚」など、知覚器官における感覚のことである。「表象的感覚」は意識内部で捉えられる質的な感覚であるが、この感覚はその質を引き起こした原因である量と深く結びついている。ここで言う「質」とは、例えば、私たちが赤色を知覚する時、そこに捉える「赤」という色の質感のことである。通常、「赤」と感じられるその色は、私たちの意識の内部で把握される。それは数量化されることのない、絶対的に質的なものとして現れる。赤という色は、科学的な手法を用いれば、無数の振動が収縮したものとして認識することが出来る。しかし、これは振動数へと数量化された赤であり、私たちが意識の内部で捉える赤という質感とは異なる。科学が説明する赤色は、人間の意識が直接的に把握する赤色とは別のものである。それゆえ、「質」は、数量化されることのないものとして扱われなければならない。

また、感覚を引き起こす量的なものとは、人間の身体のことをいう。身体には物質的な側面があり、例えば発声における音の高低は、その音を出すために、どれほどの筋肉運動が伴うかに依存するとベルクソンは考える。(DI, 32-33, 邦訳『意識に直接与えられているものについての試論』竹内信夫訳、49-50頁) 例えば、高い音を発する時には、身体全体の筋肉がその発声に関与する一方、低い声を出す時に関与する全身の筋肉部位は、高い音を出す時に比べて減少するとベルクソンは同じ個所で述べている。すなわち、大きな声を出すには多くの筋肉が関与する一方で、小さな声の場合には、それに関わる筋肉の部位も少ない。このように、「表象的感覚」においては、結果である質的な心理状態の中に、原因である身体性という量的なものに関係する。

身体性と感覚の間には、互いに関連が存在する。というのは、例えば眼が見えない人には、赤色とはどのようなものか想像することが出来ないからである。感覚は身体性から離れて考察することは出来ない。しかし、先ほど述べたように、例えば赤という感覚は、私の意識には純粋に質的な感覚として現れる。私たちの意識は、身体が外から受け取った刺激を、このような質感として受け取るのである。

ベルクソンは、私たちは生まれてから絶えずある感覚は一定の身体的な刺激と結びつけられていることから、「表象的感覚の大きさは、結果の中に原因を入れることに起因する」(DI, 34)とする誤解が生じると言う。質的なものであるはずの結果が、原因としての量的なものに誤って解釈されるのである。これは序文で述べたカントの「内包量」の概念に対する批判である。感覚は量を含まない純粋に質的なものであるため、そこに量的な概念を導入することは退けられなければならない。

ベルクソンは質的な心理状態と量を別の問題として扱っているのではない。両者の間には密

接な関連があるとしながらも、その原因を誤った結果の中に帰属させることを指摘するのである。すなわち、結果としての質的な心理状態の内に、量である身体運動を帰属させるという誤りである。このように、両者が混同されて考察されることは、身体運動における事実が見逃され、ベルクソンが目指す事実そのものの記述が不可能になることを示している。これは、序文で述べた、ベルクソンが事実そのものの記述を目指すことに反する姿勢である。「表象的感覚」の考察を通じて、ベルクソンはカントの批判を行い、事実そのものの記述を試みている。言い換えれば、我々はベルクソンのカント批判を、彼の論述の方法にとって妥当なものとして受け止めることが出来るのである。次章では、本章で考察した「質」という概念を踏まえたうえで、ベルクソンにおける論述の方法とその意義を、身体性との結びつきからより詳しく検討してみよう。

2. 身体的感覚と結びついた内的緊張

本章では、筋肉努力の感覚の例を取り上げながら、『試論』で言われる「内的緊張」について、身体的感覚と関連付けて検討する。

ワームズは『試論』の第一章の役割に、「最も深いものから(中略)最も外的なものまでの、私たちの意識のあらゆる状態の多様性を示すこと」(DS, 56)があるという。この点に関して彼はまた、「これら二つの両極の間には、その特性が空間化の特定の要因を導入することである、『感情的感覚』と『努力』の感覚が位置している」(DS, 56)と述べている。身体的感覚と結びついた内的緊張を考察するに際して、「感情的感覚」(sensations affectives)と「努力の感覚」(sensations de l'effort)を両極に置くことが出来るとワームズは考える。「感情的感覚」と「努力の感覚」は身体性に関する概念である。以下、これらの概念の特徴をそれぞれ検討してから、そこから導かれるベルクソンの質的な方法の特徴を示してみよう。その結論として、ベルクソンは内的緊張の実際の姿を示すために、二つの極を提示しながら、現実の様々な様態の記述を行うことを可能にしていることが示されるだろう。

まず、「感情的感覚」について検討する。ベルクソンはこの概念を次のように定義する。

知覚できない程の段階によって、反射運動から自由運動へと高まることに注目する必要がある。また、これら自由運動が反射運動と異なるのは、とりわけ、自由運動の原因となった外界の活動とそれに引き続く必要な反応の間に、感情的感覚を挿入している点であることに、注目する必要がある。(DI, 25)⁽⁸⁾

外界の活動は、私たちに何らかの反応を引き起こす。反射運動においては、この外界の活動とそれが機縁となって起こる反応との間に、何も介入するものが存在しない。しかし、進化の

段階が進むにつれて、生物の反応は、反射的なものから次第に意志的なものへと変化する。外界の活動が引き起こす反応の間に、生物の側からの選択が生じるのである。この意志的な選択を生じさせる要因が、「感情的感覚」である。「感情的」(affectif)という言葉は、アンドレ・ラランドは「感覚機能を備えた生体において、部分的な反応が存在することであり、ある個別の状態によって、外界から受けた変更を表現するもの」(VP, 29)と定義する。生体は外界から受けた刺激に、自身に固有の方法で反応するのである。ベルクソンは言う。

感情的状態は、生じた身体的な振動や運動や現象と単に一致しなければならないだけでなく、特に、まさに今準備され存在しようとする運動と一致するに違いない。(DI, 26)⁽⁹⁾

「感情的状態」は、起こったばかりの身体的な運動の結果に対応するだけでなく、まさに今起ころうとする身体運動と一致するとベルクソンは言う。これは、行動する場面において、感情が反射運動と意志的運動の間を仲介する役割を担うということである。例えば、脊髄などで反射運動が起こる場合、行動は一種の自動運動として遂行される。一方、生物の階梯を上っていくと、ある種の生物では、自動運動に加えて、苦痛などが感情として意識される。自動運動だけではなく、感情的要素をそこに見出すことが出来る。苦痛という感情が生じることは、その対象から逃避するなどの選択を可能にする。危険をもたらす状況からは、身を引かなければならない。もし危険な状況において感情が存在していなければ、私は危険を察知することが出来ず、危機に瀕することになる。したがって、危険な状況で感情が存在することは、例えば「逃げる」または「逃げない」という判断を生じさせる。これは両者の間で選択が可能であることを意味する。要するに、感情は、差し迫った状況に対して、私たちに緊急に対応する必要があることを知らせるのである。そのため、それは強い影響力を持つものとして私たちに認識される。これがベルクソンの言う「感情的感覚」である。

次に「努力の感覚」について検討しよう。「努力」(effort)という言葉は、プチ・ロベールで「(外的あるいは内的な)抵抗に逆らい、打ち勝つための、全ての力を動員した意識的存在の活動」⁽¹⁰⁾と定義される。「努力」とは、ある抵抗を退けるための生体の身体的活動のことである。この定義を踏まえて、「努力の感覚」における内的緊張についてベルクソンが言うところを見よう。ベルクソンは次のように述べている。

一定の努力が私たちに増大という印象をより多く与えるほど、協調的に収縮する筋肉の数も増大すること、また、有機体の一定の点における、より強い内的緊張の努力についての見かけ上の意識は、実際、この作用に関係するより広大な身体表面の知覚に還元されることが、結論となる。(DI, 19-20)⁽¹¹⁾

上記の引用の例えとして、拳を握る力を次第に強くすることについて考えてみよう。拳を握る力を強くしていくと、腕の筋肉だけでなく、肩の筋肉や全身の筋肉がその運動に加わってくる。この時意識上においては、増大するエネルギーが拳の一点に集中しているように見える。しかし実際は、腕や足の筋肉も緊張し、身体全体がその活動に関与している。すなわち、

状態それ自身の増大する内的緊張は、より次第に深くなる身体組織の振動以外の何物でもない。この振動は、関与している表層部分の数と空間的広がりによって、意識が難なく測っているものである。(DI, 23)⁽¹²⁾

身体の部位が多くその運動に関与するほど、内的緊張の度合いは強くなる。例えば重いものを持ち上げるときには、全身がその運動に関与するので、内的緊張の強さも大きくなる。反対に、関与する身体的な感覚が減少すれば、意識の内的緊張の強さは減少する。例えば休憩しているときは筋肉などが休んでいるため、内的緊張の強さが弱まる。このように、ある内的緊張の強さは、その運動に関与する筋肉運動の多寡によって決定される。

現実の内的緊張に強さには、様々な段階を見出すことが出来る。例えば、ゆっくり散歩をしている場合は、激しい身体運動と休憩している状態の中間に位置付けられる。身体的感覚と内的緊張の間には、このような関連が見られるのである。

上記の二つの特徴をまとめよう。危険な状況において、身体は瞬発的な運動を行う必要がある。その時、感覚における感情的側面が重要な役割を占める。感情が身体に素早い行動を行うためのサインを与えるからである。これは身体性における感情的側面である。また、「努力の感覚」に関しては、ある運動に関与する身体部位が増すほど、意識が捉える内的緊張の強さは大きくなる。「努力の感覚」に関する内的緊張の大きさは、身体の感覚的な要素の多寡に依存している。身体的感覚と結びついた内的緊張は、身体的感覚を伴うものであるため、そこに量的なものが関係する。しかし、私たちは身体性に結びついた内的緊張、すなわち私たちが感じる心理状態において、量的な特徴を見出すことは出来ない。というのは、第一章で論じたように、心理状態は質的なものとして把握されるのであり、そこにカントが言う内包量を含むことは出来ないからである。

では、ベルクソンが言う、身体運動と関連する質的に捉えた内的緊張とはどのようなものだろうか。それは上記で検討した、「努力の感覚」を眺めている意識が感じる内的緊張の程度のことである。ベルクソンは次のように述べている。

筋肉の努力の増大について私たちの意識が捉えるものは、より多くの周縁的な感覚の認識と、それら周縁的感覚のうちのいくつかに生じる質的変化についての認識の二つに還元される。(DI, 20-21)⁽¹³⁾

ベルクソンはここで二つの認識を区別する。一方は、全身の筋肉の感覚に関わる認識であり、他方はそのうちの一つに顕著に生じた変化の感覚である。私たちは、身体運動を行う際、自身の全体的な運動の感覚を持つとともに、そのうちの一つに特に注意を向けることができる。例えば、腕に重いものを持ちながら長い間歩いているとすると、最初は全体的な身体運動の感覚を持つ。そして、次第に腕が特に疲れてくるのを感じる。この場合、上記でベルクソンが論じる二つの身体運動に関する二つの特徴が見いだされる。すなわち、全身の筋肉の感覚に関わる認識と、その中の特定の部位に生じる感覚を認識する視点である。ベルクソンの言う身体運動と関連した内的緊張とは、単に「努力の感覚」のうちに存在するのではない。それは、身体運動を行う中で生じる、その運動から受け取る内的緊張を見る二つの視点にある。言い換えれば、身体運動に結びついた質的な心理状態は、身体運動との関連で生じる内的緊張を眺める視点に存在している。

ところで、上記の身体運動と結びついた内的緊張には、別の二つの特徴が存在するとも考えられる。まず、身体運動に関係する筋肉の数に比例して増大する、内的緊張の強さである。この場合、身体運動が激しく行われるほど、意識が感じる内的緊張の程度が増大する。他方は、必ずしも身体運動に用いられる筋肉の数に比例しない、内的緊張の強さである。以下、これら二つの特徴について詳しく見てみよう。

まず、前者の場合を検討する。実際の身体運動は、これら二つの極の要素が混合した形で存在する。例えば全力疾走を行ったとする。私の身体は多くのエネルギーを用いて筋肉を活動させる。走り終わった後、私は全力疾走の後に特有の強い感情を持つ。この時の感情は、「それ以上身体運動を続けると危険である」という注意を持つ。私の意識は、行われた身体運動の「努力の感覚」とともに、このような感情的要素を一つに統合したものとして認識する。すなわち、二つの極の要素が混合された形で、実際の内的緊張の強さは作り出されている。そして、一方の側の強さの増大は、他方の側の内的緊張の強さを伴う。というのは、激しい身体運動を行うほど、そこから受け取る感情も大きくなるからである。反対に、強い感情にも、例えば赤面する場合など、身体的な兆候が読み取れる。このように、両者の間には比例に似た強い関連が読み取れる。

次に、「努力の感覚」、すなわち身体運動において用いられる筋肉の数との関連を残しつつも、筋肉の数の増大だけから解釈されない内的緊張について検討する。例えとして、恐怖を感じ全力疾走で逃げ去った状態を考えてみよう。全力で恐怖をもたらす対象から逃避すると、しばらくして私は自身の内部に強い情動を感じる。この時筋肉を用いて行った身体の激しい動作は、すでにある程度落ち着いた状態にある。しかし、それにもかかわらず私は自身の内部に強い内的緊張を感じている。これは身体的な感覚の増大だけからは説明されない、心理的な状態である。恐怖を感じることは、それが危険である可能性が高いことであり、その状態を避ける必要

がある。この時、実際に逃避という量的な問題としての身体的な行動が生じる。すなわち、最初に「感情的感覚」の強さが存在し、次に身体運動という「努力の感覚」が引き起こされる。そして、危険な対象から逃げ切った場合、実際的な危険は過ぎ去り、身体運動も落ち着いた状態にあるなかでも、恐怖という強い程度にある内的緊張を認識する。言い換えれば、この場合まず全身の筋肉の動作を伴う身体運動が存在し、その後恐怖という内的緊張が経験される。要するに、ベルクソンは筋肉感覚の増大が、単に内的緊張の程度を強い状態へと向かわせると考えるのではなく、「感情的感覚」と「努力の感覚」という二つの極の間に、一方が強い程度にあれば、他方は依然として弱い内的緊張の程度にある場合を想定している。この点について、ベルクソン自身は次のように述べている。

これら情動の強さは、それら感情に伴う周縁的感覚の数と本性によって測られる。少しずつ、そして感情的状態が深みに至るためにその荒々しさを失うにつれて、周縁的感覚は内的状態にその場所を譲り渡す。これはもはや私たちの外的な運動ではなく、私たちの観念であり、記憶であり、私たちの一般的意識状態なのであり、数の違いはあれ、一定の方向に向かっているのである。(DI, 24)⁽¹⁴⁾

実際に恐怖を感じ身体運動を行ったあとでも、恐怖という内的緊張は質的なものとして心理状態のなかに残る。内的緊張の程度が維持される一方で、「努力の感覚」としての内的緊張の程度は弱まるのである。要するに、実際に危険な対象から逃げるために行う身体運動すなわち「努力の感覚」は、恐怖が過ぎ去った後の意識状態として、身体運動がおさまった後でも存続する。そこには単に用いられる筋肉の数が増大/減少に比例した、内的緊張の程度の変化が存在するのではない。ベルクソンは上記で述べた内容から、より多様な内的緊張の様態を示そうとしているとも言えよう。

上記の考察をまとめよう。身体的感覚と結びついた内的緊張の場合においては、ワームズの区分に従って一方の極に「感情的感覚」を置き、他方の極に「努力の感覚」を置くことが可能である。しかし、ここで言われる両極は、一般に考えられるような対立するものとして扱われているのではない。それは現実存在する多様な内的緊張の程度を説明するために置かれた目印である。というのは、何も無い場所に何かを認識することは困難であるが、これら目印が存在することで、多様な現実の様態がこの二つの極の間に位置付けられるようになるからである。言い換えれば、二つの両極を置くことで、身体運動に関するベルクソンの論述は、多様な現実を含むことの出来る記述が可能となるのである。さらに、ベルクソンは身体運動において用いられる筋肉数の増大に伴う内的緊張の程度の増大と、必ずしもその比例関係に還元されない身体性の特徴について検討している。これはベルクソンの論述の方法がより包括的な特徴を持つ方法であることを示唆していると言えよう。

三. 結論

本論文では、『試論』の第一章を取り上げ、ベルクソンにおける論述の方法とその意義を検討した。本論では、実際の内的緊張の姿を示すために、二つの要点を設け議論を進めた。まず、第一章では、「表象的感覚」を取り上げ、ベルクソンのカント批判を検討した。カントは感覚には量的なもの(内包量)が伴われると考えるが、意識は質的な内的緊張だけを認識する。ベルクソンはこの点でカントを批判している。次に、身体的感覚と結びついた内的緊張について検討した。この考察を通して、内的緊張の実際の姿が、現実の多様な側面で構成されていることが明らかになった。ベルクソンの記述の方法は、「感情的感覚」と「努力の感覚」という二つの極を置くことで、身体的感覚と結びついた内的緊張の、あらゆる段階の記述を可能にする。本論文のはじめで述べたように、西洋の伝統的な哲学は、思考と事実の一致を目指してきた。しかし、ベルクソンはそのような理性に重点を置きながら思索を行うのではなく、事実そのものに即して思考を展開する。そして、現実中存在する無数の事実を包摂的に記述するために、二つの極を目印として置き、その間に存在する様々な事実の姿の記述を可能にしている。

このような方法は、単にベルクソンの最初の著作である『試論』においてだけ見られるものではない、本論文では扱うことができなかったが、ベルクソンは彼の第二の主著『物質と記憶』においても、「純粹知覚」と「純粹記憶」という二極を想定し、これら二つの極の間に実際の心理状態を位置付けようとしている。それゆえ、本稿で示したベルクソンの論述の方法は、単にベルクソンの主著の第一章においてだけ現れるものではなく、後の著作においても見られる彼の方法である。言い換えれば、ベルクソンは彼の最初の著作からすでに、自身の論述の方法を確立していたと言えるだろう。本論文では、『試論』における身体運動と結びついた内的緊張の考察を通して、ベルクソンの論述の方法が現実の多様な側面を記述することが出来る、というテーゼを検証した。

参考(引用)文献

[VP] = André Lalande, *Vocabulaire technique et critique de la philosophie*, Éditions PUF, 1985.

[CP] = Bergson, H. *Cours de psychologie*, SÉHA, 2008.

[DI] = Bergson, H. *Essai sur les données immédiates de la conscience*, in *Œuvres*, pp.1-157. (『意識に直接与えられているものについての試論』、竹内信夫訳、白水社、2010年。)

[CV] = Bergson, H. *La conscience et la vie*, in *Œuvres*, Paris, Presses Universitaires de France, 1959, pp.815-836. (『思想と動き』所収、原章二訳、平凡社、2013年。)

[PW] = Bergson, H. *Sur le pragmatisme de William James*, in *Œuvres*, pp.1440–1450. (『思想と動き』所収、原章二訳、平凡社、2013年。)

[DS] = Frédéric Worms, *Bergson ou les deux sens de la vie*, Éditions PUF, 2013.

Heinz Werner, *Comparative Psychology of Mental Development*, Revised Edition, 1957, International Universities Press, Inc.

Le Petit Robert de la langue française, Dictionnaires Le Robert, 2017.

イマヌエル・カント『純粋理性批判』(上)原佑訳、平凡社、2005年。

ハンス・ミヒャエル・バウムガルトナー『カント入門講義』有福考岳監訳、

『日本国語大辞典 第二版』小学館、2000～2002年。

註

(1) 以下本稿では、本文中に竹内信夫訳『意識に直接与えられているものについての試論』(DI)および原章二訳『思想と動き』を参考に作成した私訳を参考までに載せ、注でフランス語の原文を引用する。

[Mais] si, au lieu de reconstruire idéalement les choses pour la plus grande satisfaction de notre raison, nous nous en tenions purement et simplement à ce que l'expérience nous donne, nous penserions et nous nous exprimerions d'une tout autre manière.

(2) Seulement, dans des régions diverses de l'expérience, je crois apercevoir des groupes différents de faits, dont chacun, sans nous donner la connaissance désirée, nous montre une direction où la trouver. Or, c'est quelque chose que d'avoir une direction. Et c'est beaucoup que d'en avoir plusieurs, car ces directions doivent converger sur un même point, et ce point est justement celui que nous cherchons.

(3) 本稿で用いる「内的緊張」という言葉は *intensité* という語の竹内訳である。これは「強度」と訳されてきたが、意識内部での緊張度という意味を強調するために竹内訳を使用した。

(4) [Pour résumer ce qui précède, nous dirons que] la notion d'intensité se présente sous un double aspect, selon qu'on étudie les états de conscience représentatifs d'une cause extérieure, ou ceux qui se suffisent à eux-mêmes. Dans le premier cas, la perception de l'intensité consiste dans une certaine évaluation de la grandeur de la cause par une certaine qualité de l'effet [...] Dans le second, nous appelons intensité la multiplicité plus ou moins considérable de faits psychiques simples que nous devinons au sein de l'état fondamental :

(5) Koehler, Wolfgang, *Nachweis einfacher Strukturfunktionen beim Schimpansen und beim Haushuhn*. Abhdl. d. Preuss. Mod., Phys.-Math. Kl. 1918.

(6) Heinz Werner, *Comparative Psychology of Mental Development*, p.216.

(7) 『日本国語大辞典 第二版』小学館 2000~2002 年刊。

(8) Il faut remarquer [en outre] qu'on s'élève par degrés insensibles des mouvements automatiques aux mouvements libres, et que ces derniers diffèrent surtout des précédents en ce qu'ils nous présentent, entre l'action extérieure qui en est l'occasion et la réaction voulue qui s'ensuit, une sensation affective intercalée.

(9) L'état affectif ne doit [donc] pas correspondre seulement aux ébranlements, mouvements ou phénomènes physiques qui ont été, mais encore et surtout à ceux qui se préparent, à ceux qui voudraient être.

(10) *Le Petit Robert de la langue française*, p.826.

(11) Nous prétendons que plus un effort donné nous fait l'effet de croître, plus augmente le nombre des muscles qui se contractent sympathiquement, et que la conscience apparente d'une plus grande intensité d'effort sur un point donné de l'organisme se réduit, en réalité, à la perception d'une plus grande surface du corps s'intéressant à l'opération.

(12) L'intensité croissante de l'état lui-même n'est point autre chose, croyons-nous, que l'ébranlement de plus en plus profond de l'organisme, ébranlement que la conscience mesure sans peine par le nombre et l'étendue des surfaces intéressées.

(13) notre conscience d'un accroissement d'effort musculaire se réduit à la double perception d'un plus grand nombre de sensations périphériques et d'un changement qualitatif survenu dans quelques-unes d'entre elles.

(14) L'acuité de ces émotions s'évalue au nombre et à la nature des sensations périphériques qui les accompagnent. Peu à peu, et à mesure que l'état émotionnel perdra de sa violence pour gagner en profondeur, les sensations périphériques céderont la place à des éléments internes : ce ne seront plus nos mouvements extérieurs, mais nos idées, nos souvenirs, nos états de conscience en général qui s'orienteront, en plus ou moins grand nombre, dans une direction déterminée.

